

広島市まちづくり市民交流プラザ運営委員会 第三回運営委員会 会議録

日 時 平成 22 年 12 月 15 日(水) 15 時 00 分～17 時 00 分

場 所 まちづくり市民交流プラザ 南棟 4 階協議室

出席者 (委 員) 粟屋委員、中島委員、波多野委員、東委員、弘中委員
(プラザ) 大谷館長、新谷

議事及び会議要旨

議事 1. まちづくり市民交流プラザの管理運営について

11 月末現在の利用料金収入や利用人数、施設稼働率などの実績と、管理運営状況の報告、広島市外郭団体統廃合における、まちづくり市民交流プラザ管理者である財団法人広島市ひと・まちネットワークについて説明を行い、管理・運営などについて意見が交わされました。

- ・ ひと・まちが市民に愛されてきたのは市民サイドで運営しているからである。
- ・ 出入りする人が喜んでくれることが大切。一步間違えると貸し館になってしまう。
- ・ 利用する立場からすると、事務室で職員と目を合わせた瞬間すぐに会釈やあいさつをされる。この関係が大切と思う。最近はパソコンに向き合い、顔を合わすことをしない職員が多い。こういうことが利用しやすい施設かどうかになってくる。
- ・ 基本的なことであるが、あいさつは大事である。
- ・ 公民館の話になるが、最近は講座の相談に対応できる職員が少なくなってきたように感じる。
- ・ 指定管理になって企画や運営がよくなった施設もある。
- 市民活動への支援に必要な事業を企画していくには、職員の専門性だけで行えるものではなく、他のさまざまな NPO 関係団体や組織との連携が必要であり、職員にはそうしたところとのネットワークを大切にしていってほしいと考えている。
- ・ 郊外の公民館において、4 公民館が連携して 3 年間の計画で、地域の中で公民館事業をコーディネートできる人材を養成する取り組みを行っている事例がある。すでにその中からグループができて、公民館と共催で事業を実施している。
- プラザでも、これまでの事業参加者が、今後、プラザ事業の企画や運営に協力してもらえるように、学習成果の活用を図ることができればと考えている。
- ・ 講座を受講しただけでは施設のファンにはならないが、受講した成果を活用できる場があればファンになってくれると思う。プラザのファンをつくるということは、プラザが何か行動しようとしたとき、協力してくれる人がどれだけいるかだと思う。それが職員の力だと思う。職員の手だけで何かしようと思っても限界がある。
- ・ 人と人が結びつくことはすごく大事である。人間力である。ある施設では「この人（職員）のためなら」と喜んで動いてくれるボランティアの方もいる。
- ・ ボランティアと言っても気持ちで動く。気持ちが合えば何でも協力しましょうということになる。
- ・ 施設に適した職員の配置も必要である。
- ・ プラザは全市施設として公民館のような地域性はあまりないというが、大学と連携することで若者が来るようなことにはならないか。
- 2 月に比治山大学短期大学部のゼミとの共催で、学生が実施した若者の余暇に対する意識調査を基に、ボランティア活動の事例発表と合わせ、若者自身が人や社会とのつながりを持つことなどについて意見交換をする機会を設けることとしている。
- ・ そのような機会は必要である。
- ・ 余暇学的にはゲームなどその場を楽しむだけの「娯楽的余暇」と、5 年～10 年と続けられ

る「創造的余暇」、スポーツなどで汗をかくといった「発散的余暇」がある。これからは「創造的余暇」を中心とすることが大切である。もちろん「休養」も必要である。

- ・ 個人で取り組むもの、グループで取り組むものをバランスよくできればよい。
- ・ 積み重ねたものを発表できる場につなげていかなければならない。認められる場があるというのは大事である。
- ・ 利用者とプラザの職員という、人のつながりを大事にしていこうという傾向はいいと思う。これからもがんばってもらいたい。